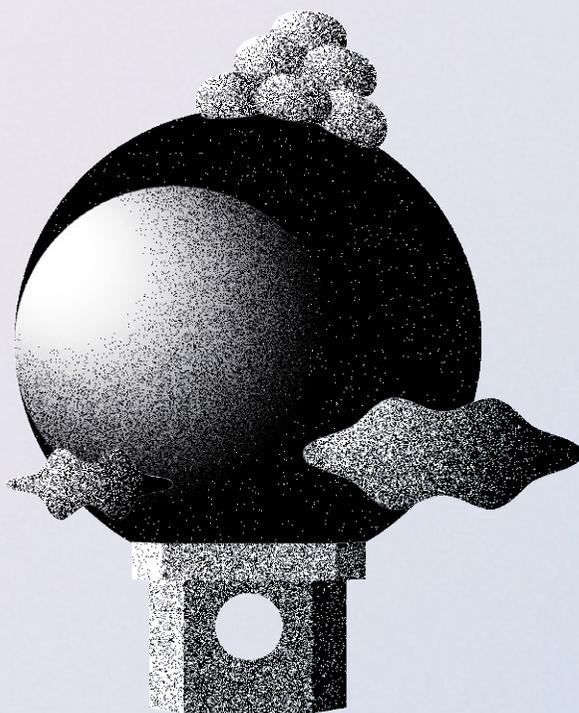


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2022年9月 NO.227



[もくじ]

- 2～3 大道芸人というお仕事…RYU
- 4～5 苔 らんまん 高知県…片桐知之
- 6～7 地域とともに歩み続ける…大池智士
- 8～9 〈山中賞〉という書店員の文学賞をやっています…山中由貴
- 10 日本では猿も花をいける…猪野一鐘
- 11 「アンテナ」『世界ふしぎ発見!』出演話…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団7～8月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「月見」坂本翔哉

公益財団法人高知市文化振興事業団

大道芸人というお仕事

RYU

六月七日から四日間、高知市内の中学校を回って大道芸をしてきました。高知市文化振興事業団の主催事業で、誰もが自然と楽しめる大道芸を通して子どもたちに文化芸術を身近に感じてもらうという取り組みとすることで依頼を受けました。

体育館での公演、しかもお客さんが中学生オンリーという状況はなかなか経験のないことだったので「いったいどんな雰囲気になるんだろうか？」と内心ハラハラしていたのですが、そんな心配も吹き飛ばくくらいに良い生徒さんたちに恵まれて、とても楽しい時間を過ごすことができました。理解ある先生方と主催者の皆さんの支えがあったからこそです。この場をお借りして、ありがとうございます。

僕自身初めて路上で大道芸を見たのが中学二年生の頃で、その時の感動が原動力となって、今でも

大道芸を続けています。最初はちょっととした興味で道具を買いはじめ、興味から趣味へ、趣味から仕事へ。そして気がつけば生き甲斐のようになっています。その時はまさか自分が大道芸で生きていくことになるとは思っていませんでしたが、結果的にはそれが運命の出会いだったのでしょうか。

思い返してみると、芸そのものが面白かったこと以上に、たまたまその場に居合わせた人たちが巻き込まれていく様子が面白くて、そこに惹かれたのだと思います。最初に見たのがステージショーだったら、また違った人生になっていたのかもしれない。入り口も出口もない路上だからこそ、誰にでも楽しめる面白さがありました。

当時中学生だった僕には舞台を観に行ったりする習慣もなかったですし、エンターテイメントに触

れる機会といたらテレビの中だけ。コメディにしても音楽にしても、なかなかライブに出会うチャンスってなかったんです。そんな中で、ぶらっと歩いてた人たちがいつの間にか「お客さん」になっ

てしまう大道芸はとても魅力的に見えました。

今回出演のお話をいただいた時、まず頭に浮かんだのが「しっかりと大道芸をやりたいな」ということでした。体育館の中、しかもお客さんは全員中学生。一見すると大道芸とは矛盾している環境なのですが、僕があつた時に感じたような路上の面白さを生徒さんたちにも体験してほしいからです。技のすごさやネタの面白さだけではなく、大道芸は「人と人とのコミュニケーションなんだよ」ということを知ってもらいたかったです。さらには「こんなことも職業になるんだよ」と知ってもらって、将

来への選択肢を広げていってほしいなとも思いました。

老若男女とは、年齢や性別を超えて「色々な人」を表す言葉ですが、そこに加えて喜怒哀楽も大切な要素なのではないかと思っています。男の人や女の人、若い人か老いてるかといった表面的なことだけではなく、喜の人や怒の人、その人の感情や状況も含めて考えてみると、より一層「色々な人」になるのではないかと思うのです。僕が仕事場に行っている路上には色々な人が歩いていきます。舞台やコンサートと違って、楽しい気持ちの人ばかりではありません。哀の人もいれば怒の人もいます。ぶらぶら散歩中の人から、これから仕事の忙しい人まで。それぞれがバラバラの気持ちを抱えながら、バラバラの方向に歩いていきます。そういった整っていない環境こそが路上の魅力だろうと思うのです。

今回の学校訪問にしても、中学生と一括りにしてしまえば若の男女ということになりませんが、その中には控えめな人、はしゃぐ人、眠たい人、単純な年齢や性別では計れないような色々な人がいるのだろうと思います。全員が同じ学

年でも、色々な人がいる。そういう意味では路上でも体育館でも大きな違いはありません。

「さあ、○時間目の授業は大道芸を見ましょう！」となった時、たぶん、それぞれの生徒さんにそれぞれの考えがあるはずなんです。面白そうだなあと前のめりに見ようとする人もいれば、ちよつと怪しいなあと距離をとる人もいるでしょう。どーでもいいやと寝てしまう人もいれば、途中で帰りたくなる人もいるでしょうし。それが自然なんだろうと思います。そういった色々な考えの人に、たくさん選択肢が用意されているのが大道芸の面白さです。近くで見たり、遠くで見たり。座って見たり、立って見たり。後ろから見てもらっても構わないですし、そもそも見ないという選択肢だってアリなのです。



ので、今回の公演では生徒さんそれぞれの好きな場所から大道芸を楽しんでもらうことにしました。せつかく整列してもらったところ申し訳なかったのですが、一回頭をフラットにしていたら、気の向くままに動いてほしかったのです。(さすがに授業なので帰っちゃう人がいたらどうしようかと思っていました。幸いそんな生徒さんは現れずホッとしました。)僕たち大道芸人は、パフォーマンスの中でお客さんにたくさんのご要望を求めています。足を止めてほしい、近くにきてほしい、拍手してほしい。冗談を交えつつ、最

後には投げ銭の話もします。客上げと呼ばれる、お客さんに直接お手伝いを頼むようなネタもあります。そうした要求に応じてくれるかはお客さんの気持ち次第なのですが、上手くない時というのはいない時です。どんなにすごい技がなくても、どんなに面白いネタがあっても、信頼がなければ誰も要求には応えてくれません。大道芸人とお客さんはいつも「はじめまして」から始まります。いつもゼロからのスタートです。ついさつき出会ったばかりの大道芸人をなんとかして信頼してもらおうと、四苦八苦しながら芸を披露しています。興味を引けるような技をやってみたり、面白いことを言ってみたり、面白いことを言ってみたり。毎回違ったシチュエーションの中で、その時にしかない答えを探しています。

今回、高知市内七校の中学校にお邪魔してきました。全部の公演が体育館の中のことだったので、これはひよつとすると毎回同じ内容になってしまうのではないかと心配したのですが、そこはやはり人が作る空気。それぞれの公演

が個性的で、とても面白いものになりました。何のイレギュラーも起こらない体育館のような空間であつても、そこに集まってくれた人たちの雰囲気次第でどんな流れが変わっていくのは、あらためてとても興味深いことだなあと思えました。

日常生活と同じように、人付き合いにはこれといった正解はありません。この先三十年、四十年と芸歴を重ねていってもお客さんとはずつと初対面なので、これは大道芸人にとって永遠のテーマなのでしょうね。

りゆう

一九八五年 神奈川県生まれ。
へブンアーティスト、江ノ島大道芸パフォーマンスのライセンス保持者であり、首都圏だけでなく、北海道や宮城県など地方でのパフォーマンスも行っている。
ボールやファイヤートーチなどでのトスジャグリングを中心に、ラダーや一輪車、スピードキューブ、マジック、バルーン、デビルスティック、ディアポロなどを行う。

苔らんまん 高知県

片桐 知之

苔の研究者からみた高知

コケ植物を日々研究している研究者にとって高知県は特別な存在です。ふつう高知県で植物といえれば牧野富太郎博士（一八六二—一九五七、佐川町西町出身）が真っ先に浮かぶかと思いますが、少し立ち止まってコケ植物の世界へ目を向けてみるとこれまで気が付かなかった多くの興味深い事実を発見することができます。コケ植物としては異例の県指定天然記念物であるサカワヤスデゴケ、佐川町におけるマキノゴケをはじめとするコケ植物六種の町指定天然記念物、そして日本の蘚苔類学（コケ植物を研究する学問）を牽引してきた高知県出身の苔の研究者の存在です。牧野博士と同郷で日本苔類学の創始者ともいわれている吉永虎馬氏（一八七一一—一九四六、佐川町西谷）、牧野博士の薦めによりコケを学び生徒から理科の先生コケの虫」と歌われるほどにコ

ケの研究に没頭され後に高知県文化賞を受けられた愛弟子で生前に牧野博士の伝記（写真1）を書くことを許された上村登博士（一九〇九—一九九三、土佐市岩戸）、高知大で最初にコケ植物の研究に取り組んだ原幹雄博士（一九二九—二〇〇六、大豊町穴内）、国立科学博物館で研究を行わが国の蘚苔類学界に不滅の金字塔をうち建てた井上浩博士（一九三二—八九、南国市稲生）など。いずれも高知の豊かな自然に生まれ、苔に目を



写真1 上村登博士著『花と恋して』(1955年、六月社)、『花と恋して 牧野富太郎伝』(1999年、高知新聞社)

向けて世界規模の研究を展開され輝かしい業績を残されています。もしかすると



写真2 井上浩博士の顕彰記念碑(牧野植物園内)

高知県民の一部にはコケの魅力を発見する能力が生まれつき備わっているのかもしれない。

高知県立牧野植物園内には井上浩博士の顕彰記念碑（写真2）があることをご存じでしょうか。多くの人が通る場所にあるのですが、普段は綺麗な花に目を奪われて足を止める人は少ないかもしれません。是非探してみてください。そして、美しいハネゴケの線画と井上博士の写真の前に足を止め、苔を研究するという学問の分野があり、それに生涯をささげた高知出身の多くの研究者がいたこと、また苔を愛する人々が身近にいることを知っていただければ幸いです。

苔研究へのわたしの道

福岡県の自然の少ない場所で育った私は動植物や野山が昔から大

好きで、自然豊かな信州大学に入学しました。大学の先生でも知らないことを学びたいと考えていた時にコケ植物の存在が気になり始めました。意識して見るようになるとコケはとても身近にある植物だとわかりましたが、当時は頼れる図鑑も少なく名前を調べるのも一人では無理だということがすぐにわかりました。コケ植物の師を求め広島大学の大学院に進学し、指導教員となる出口博則先生と出会いました。当時は出口先生が高知大学で教授を務められていたことは知りませんでした。地味なコケの世界は水が合ったのか、順調に学位を取得して大学院卒業後はすぐに広島大学の教員に採用されました。その後、世界唯一のコケ専門の研究機関である公益財団法人服部植物研究所（宮崎県）に所長として務めていましたが、この度縁あって高知県に移住しました。これから高知県の自然と文化を学び、新たな魅力を開拓していくのが楽しみです。

「研究をはじめたらすぐに日本でも五本の指に入る」ともいわれるほど研究者の少ないコケの世界は、本格的に勉強を始めると奥深く歴史と伝統のある植物分類学の

中でもクラシッくな学問分野であることがわかります。コケ植物は小さいので種類を見分けるのは顕微鏡が必須で、葉の切片を作る訓練や英語の論文や図鑑に習熟する必要があり、なかなか根気が必要な作業ですが、他の人と激しい競争があるわけではなく、目の前のコケと向き合うことが主な仕事です。そして、顕微鏡を通して見るコケの美しさ、新種を発見する喜び、コケと真剣に向き合った人だけがわかる多様性と進化の面白さなどが私の研究の原動力です。可能であればこの魅力あるコケの世界をより多くの方々にも知っていただき、先人達が遺した貴重な資産を次の世代に受け継いでいきたいと思っています。

高知での研究テーマ

高知県に来て最初に興味をもったのはサカワヤステゴケです。このコケは吉永虎馬氏により一八九六年に佐川町聖神社境内(写真3)



写真3 サカワヤステゴケの石碑 (佐川町)

で採集され、その標本を基にしてドイツの苔類学者フランツ・ステファニー(一八四二—一九二七)により一八九七年に新種(学名: *Frullania sakawana*、読み方: フルニア・サカワナ)として発表されました。佐川町の宝ともいえるこのコケの和名も吉永氏によるものです。県の天然記念物にも指定されている貴重な絶滅危惧種なのですが、近年の調査では少なくとも二十年以上生育が確認されておらず、聖神社周辺からは絶滅したものと考えられています。そこで私は本種の佐川町内及び県内での詳細な分布を明らかにすると同時に、生育量が減少した要因の解明などにも注目して研究していきたいと考えています。

高知大学の苔研究室とは

高知県とコケ植物の関係を語る上で忘れてはならないのが私の職場でもある高知大学の植物分類学研究室と植物標本庫の存在です。

当研究室と植物標本庫の歴史は高知大学の開学から四年後の一九五三年に原幹雄博士が助手として採用されたことから始まります。その後、出口博則博士、松井透博士と一貫してコケ専門の研究者を迎

えて地道に研究を進めながら植物分類学の研究拠点の一つとして確固たる地位を築いてきました。二〇二三年には創設七十年を迎えます。標本庫には約八万点のコケ植物の標本が収蔵されており、KOCHという国際的な略号も取得して国内外の大学や博物館との間で標本の貸借や交換を行っています。研究内容も当初から高知県や四国のコケ植物相の研究にとどまらず、奄美群島や琉球列島の学術調査、さらにはフィリピンや南米チリでも調査を行うなど世界規模での研究が進められてきました。日々足元の小さなコケを観察しながら、もう一方では常に世界に眼を向けて研究を進めていたことがわかります。身近なことを出発点として世界を見るこの姿勢は、苔の研究に限らず私たちの日常を豊かにしてくれるものでもあります。

二〇二一年三月に松井博士が急逝され、植物標本庫に所蔵するコケ植物標本の維持管理及び伝統ある当研究室を存続・発展させるために筆者が同年十二月から着任することになりました。まずは残された大量の資料と未整理標本を整理整頓する必要がありますが、わたし一人では明らかに力不足です

（写真4）この歴史あるコケ植物の研究室と標本庫を継承し、さらに魅力あるものにするためには皆様のお力が必要だと思います。標本の整理や研究を一緒に行っていただけます。また、標本整理のためのご寄附の申し出も大変ありがたいです。ご連絡お待ちしております。



写真4 高知大学植物標本庫の様子

かたぎり ともゆき

一九八三年福岡市生まれ。博士(理学)。高知大学理工学部生物科学科・講師。専門はコケ植物の分類。広島大学助教、服部植物研究所の所長を経て、二〇二一年十二月より現職。

片桐知之研究室 苔研

ホームページ



E-mail: tomoyuki-katagiri@kochi-u.ac.jp

電話 〇八八—八四四—八三二二

地域とともに歩み続ける

大池 智士



【地域支援企画員とは】

高知県には「地域支援企画員」と呼ばれる職員がいます。県職員でありながら、市町村役場に駐在し、市町村や地域の方々と連携して地域産業の振興や地域づくりに携わっています。

地域づくりの主役は住民ですが、地域支援企画員は黒子として県と地域のパイプ役になり、県の政策や支援制度などを紹介するとともに、地域の情報を汲み上げて関係機関につなぐ役割を担っています。県内七つのブロックに分かれ、総勢六十名体制で活動しており、他の県職員と同様、数年で異動があり、勤務年数も経験も様々です。農林水産業や商工、観光など、幅

広い分野に関わる必要があるため、毎日が勉強です。

【高知県職員になるまで〜宝は足下にある〜】

日本では、特に高度経済成長期以降、農山漁村から都会への人口流出が顕著になりましたが、近代化・都市化の陰で、田舎の宝のようなものが見落とされてきたのではないかと学生の頃に感じていました。

ご縁があり、四万十市西土佐の集落でフィールドワークをするようになったのですが、その際、当時の地域支援企画員が地域住民とともに活動している姿に接し、「こんな仕事があるのか」と感銘を受

けたことがきっかけで、高知県職員を志すようになりました。



四万十市西土佐大宮での餅まき
(平成25年11月2日筆者撮影)

【地域支援企画員になって】

令和三年四月、地域支援企画員として宿毛市に赴任しました。県

の産業振興計画に盛り込まれた「地域アクションプラン」の実行を後押ししたり、集落活動の支援を行ったりしています。

地域特産で幻の柑橘とも言われる「直七」を扱う事業者は、新型コロナウイルス感染症拡大などにより果汁の需要が減りましたが、県内外の企業と連携し、新たな商品の開発に精力的に取り組んでいます。微力ながら応援のため、地域支援企画員の公式SNSでも新商品の情報を発信しました。

地元の老舗パン屋さんでも、県の事業を活用してアドバイザーを招き、商品開発に向けた議論を行いました。一緒に助言の内容を整理することで、事業者が自社の個性を再認識し、大手企業と差別化していくためのお手伝いをしました。レトロ商品の復刻という形で一つの出口が見えたときには、私もホッとしました。

また、宿毛市には有人離島が二つあります。沖の島と鶴来島です。離島には常駐の医師がいないため、海が荒れて定期船が欠航すると医師が来られなくなるなど、様々な面で不便なことが多いのですが、島民同士、助け合って暮らしてい

ます。さらに、主要産業であった漁業の衰退などに伴い、人口流出や少子化が進み、生活に欠かせない共同作業や祭りのような地域行事をどうやって継続していくかが問われています。

【地域の豊かさを掘り起す】

厳しい状況の中でも、島の豊かさを引き出したキラリと光る取り組みが行われています。去る七月、沖の島観光協会の主催で、沖の島の周辺をカヌーで巡る自然体験イベント「沖の島アドベンチャーラ」が開催され、私も一緒にカヌーを漕いで伴走しました。

当日は天候にも恵まれ、地元メンバーの案内により、参加者は白亜の洞窟をくぐり抜ける非日常体験もでき、陸に上がってからは地元産の魚介類に舌鼓を打ちました。景観や海産物といった島にある資源を活かしたオンリーワンの催しです。

参加者を見送った後、青壮年の運営メンバーが談笑しながら、次回の開催に向けて改善点を出し合う様子や、海に遊びに行く夏休み中の子どもたちを温かく見守る姿が印象的でした。



沖の島でのイベント参加者見送り
(令和4年7月24日筆者撮影)

【地域の課題に向き合う】

もう一つの有人離島の鵜来島は、島内に十九名の方が居住しており、その中で動ける方がフル稼働で島の生活を支えています。生活基盤や様々な活動の維持や、後継者の確保といった課題が差し迫っています。

鵜来島の地域コミュニティ存続の象徴である「秋の祭り」では、牛鬼、神輿、櫓を担ぐために百名ほどの人手が必要で、近年は島外からも担ぎ手が来ていました。令和二年からは新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止を余儀なくされていますが、代わりに島内の方で過去の録画映像を見ながら食事会をしています。

地域の方から相談を受けたとき、すぐに解決するのは難しいですが、他の事例を調べたりしながら、実態に合った支援策を模索しています。

昨年は濱田知事の視察があり、その準備などのため何度か島を訪れました。本番の知事視察の際には、島民の皆さんが「鵜来島音頭」を唄ってくださいました。♪うぐる 良いとこ 小島じゃけれど♪ で始まる歌詞の中には、島民の故郷への愛が溢れていました。このような思いを持つ人々が暮らしている地域こそ、高知県の宝だと感じました。

【あくまで地域が主役】

様々な地域において、これまでも地域外の方々と関わりながら様々な取り組みがされていると思います。そして、そこには地元のことを真剣に考えている方がおられます。私が地域の方々と接する場合は、長く住んでいる方から教えを乞うという気持ちで臨んでいます。その上で、県が関われる範囲で一緒になって目標の実現に向けてお手伝いするように心がけています。

また、その地域に最も近い公務員は市町村の職員さんであり、最後まで地域に残るのは地元の方ご自身であることから、活動が長続きするためには、市町村や地元メンバーが納得でき、個々の努力が噛み合う取り組みであることが重要です。言うは易く行うは難しですが、話し合いなどの場では意見が出やすくなる雰囲気づくりを心がけ、地域にどんな声があるかを気にかけて、間に入って何らかの案を引き出せるよう、黒子役として研鑽を積んでいきます。

地域支援企画員の活動について、詳しくはホームページやInstagramグラムをご覧ください。



県庁ホームページ



公式Instagram

おおいけ さとし

一九八八年 香川県丸亀市生まれ。宿毛市に駐在する地域支援企画員。二〇一五年に高知県入庁。大川村役場むらづくり推進課への派遣を経て二〇二一年から現職。

〈山中賞〉という書店員の 文学賞をやっています

山中 由貴

芥川・直木賞は年二回、一月と七月、同時に発表される。それはもう、作家の人生を一夜で変えてしまう文学界ではいっばんの榮譽ある賞だ。

その受賞作決定の前日、高知の片隅のチェーン書店TSUTAYA A中万々店で芥川・直木賞よりも大々的に発表され、めちゃくちゃ盛り上がるすんばらしい文学賞がある。それが〈山中賞〉だ。〈山中賞〉の選者はたつたひとり。それはなんと……わたしだ！ババ——ン！（効果音）

わたしがほんとうに面白かった、いい本だったと本気で思える作品に贈るのが〈山中賞〉なのだ。

七月十九日、第七回〈山中賞〉が発表され、出版・書店業界をおおいに賑わせた。

受賞作はテイラー・ジェンキンス・リード作『デイジー・ジョーンズ・アンド・ザ・シックスがマジで最高だった頃』だ（以下タイトルが長すぎるので『デジマジ』と呼びます）。

天性の歌声と才能を持つテイジー・ジョーンズと、ロックバンド「ザ・シックス」がタッグを組み、数々の楽曲を生み出して聴衆を熱狂させ、一九七〇年代アメリカの音楽シーンをのぼりつめていった。その伝説の軌跡を、当時のバンドメンバーや関係者に取材したインタビュー集、という体の小説、つまりすべて架空のフェイクドキュメンタリー音楽エン

ターテイメント作品なのだ！

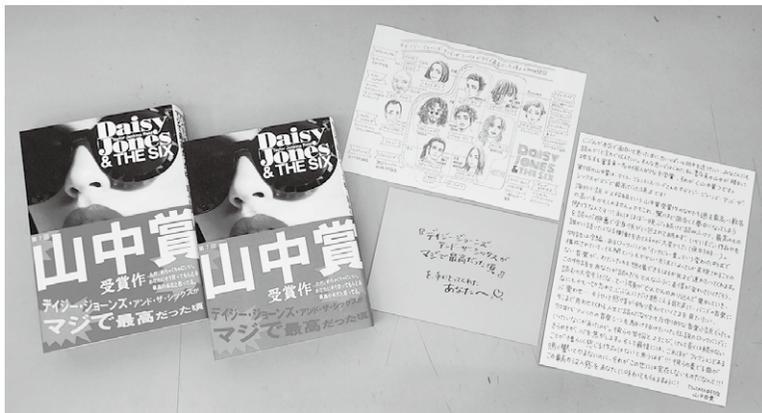
大ヒットした映画『ボヘミアン・ラプソディ』に心奪われた人も多いはず。あの興奮と感動はすごかった。アーティストの名声、苦悩、私生活とステージ、心の隙間の深淵、そして嵐のような拍手喝采に、観ているこちらまでのみ込まれる感覚。あれをそのまま小説で体験しているような。それが『デジマジ』の魅力といったら少しは伝わるだろうか。

インタビューのみで構成され、ほんぽんと語り手が移り変わっていくさまは、PVのメイキング映像を観ているようでもあり、音楽雑誌を読みふけているようでもあり、いつもの読書とはまったく違うリアリティがあつて新鮮だ。そのうえ、デイジーと「ザ・シックス」のリーダー、ビリーとの魂同士のぶつかり合いに何度も何度も胸をかき乱される。そこから生まれる曲、歌声の混じりあいは、架空のものとは思えない力強さでわたしやあなたを全身を浸し、感情という感情を揺り動かしてくる。

叫びたい！足踏みたい！腕を高くつきあげたい！

本を読んでいてこんな衝動に駆られるなんて。

たしかにそこには、自分らしく生きよう、自分自身を表現しようともがいて、苦しみながら、人々に勇気をふりまく人たちがいる。彼らにどれだけ熱をもらったかわ



からない。この熱は伝播し、おおきなうねりが起こっていくに違いない。音楽フェスや大規模ライブの、あの地鳴りのような聴衆のどよめきが耳に聴こえてくる。

それをなんとしても伝えなければ！とわたしは思っちゃったのだ。こうして第七回〈山中賞〉は『デジマジ』に決まった。

そしてじつはもう一冊、〈山中賞〉にしようと思っていた作品がある。岩井圭也さんの『生者のポエトリー』だ。これがまた素晴らしくいいのでご紹介したい。

言葉を発するのにとっても時間がかかってしまうため、人とまともに喋ることができない悠平は、心のなかに積もりに積もった言葉を詩にして書きとめていた。ある日彼は、急遽ステージの上で自分の詩を披露するというとんでもない状況に追い込まれ……。

その悠平の物語から、同じ町を舞台に、詩を書くことに心奪われた者たちの日常のひとこまがつかっていく。彼らの詩が、その言葉たちが生み出される必然性と相まって、心をぶっ刺してくる。鋭く乱暴に、あるいはやわらかく沁みこむように。小説の起承転結、物語の展開で感情をふにやふにやにされ、詩の鮮烈さで一撃を喰ら



わされる。そんな衝撃なのだ。気づけばなぜか泣いていて、胸の奥がきゅううんと震える。凝縮した熱いかたまりが、そのあとじんわり溶けていって、ああ、いいものを読んだなあ、しあわせだなあ、と思えるのだ。

打ちあけてしまうと、わたしもむかしノートの端になんとなく湧いてくる言葉を書きつづったりしたことがある。素人がポエムなんて、と恥ずかしいような気持ちで、その後そんなことは忘れてしまっていたけど、この作品を読むと、詩を書く、それを声に出してだれかに聴いてもらうって、なんて素晴らしいんだろうと素直に思う。なにか余計なものが心から剥がれ落ちていくような、いままでにない体験だった。

今回あらためて〈山中賞〉として一作品に絞るということがいかに難しいかを感じたので、〈山中賞〉受賞作を『デジマジ』と発表するっぽうで、『生者のポエトリー』も多くの人たちに届くようにと願って、「これも山中賞にしたかった」という言葉をそえて、二作品を並べることにした。両作品とも、ほんつつつつ……とうに心揺さぶられる最高の小説なので、ぜひ手にとっていただければと思う。

※なお、〈山中賞〉については過度に大きな表現をしている部分がありますが、本に対する評価は正直に書きましたので信じてください。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。

TSUTAYA 中万々店の書店員

なかましんぶん編集長として Twitter やってます。好きな本について喋るときだけ饒舌になります。

日本では猿も 花をいける

猪野 一鐘

昭和二十四年（一九四九）生まれの私が幼い頃、祖母が自宅でいけばな教室を開いていたので、いけばなは極く身近な存在でした。お弟子さん達が毎週週花をいけているのを目の当たりにして、いけばなって面白いんだろうか、一体何なんだというふうに思った記憶があります。

三十代になって祖母が創流した流派の二代目を継ぐことになりました。その頃も、いけばなという行為はいつどこで生まれ、今日まで続いてきたのだろうという疑問がありました。これから「花の道」で生きていく以上、この



照葉樹林（シイ・カシ・クスノキ・ヤブツバキ等）

疑問は早急に解決しなければなりません！幸い当時はいけばなが盛んな時代でしたので、いけばなに関する市販の文献は数多くありました。それらを買って読み漁った日々が今となっては懐かしい思い出です。

せっかくの機会ですので、ここで日本人といけばなの関わりについて、若干述べたいと思います。もとより私見ですので、ご了承下さい。

まずいけばなの成立には日本列島の風土が大きく関わっています。その特徴は、①四季の微妙な変化があり、一年を通じ多くの草花が咲き、散ってゆく②一方、列島西南部には照葉樹林という原植生があり、その葉は一年を通じて枯れることがない。照葉樹林とは常緑広葉樹林の別称で、いわゆる常磐木のことです。

我々の祖先は何万年にもわたり、日々の暮らしのなかで咲き、散ってゆく草花に命の「儚さ」を、照葉樹林に命の「永遠」を感じてきたことでしょう。こうして永い年月のなかで、日本人の植物に対する特殊な感情が育まれてきたと考えられます。

六世紀に仏教が伝来します。いけばなの成立にはこの仏教伝来の影響が極めて大きかったです。仏典には仏様の供養として「灯明」、「香」、そして「花」を供えよ、とありました。以後仏教の普及につれ日本人はせっせと仏様（神様にも）に花を供えるようになります。やがて、猿も花をいけるようになるのです。

表題に記した「鳥獣戯画」は平安時代後期の作品です。



鳥獣戯画 桃底の花瓶に蓮華を立て、僧形の猿が常緑樹の枝を手に、芭蕉の光背を持つ蛙の仏に供養している。（高山寺蔵）※

そして十五世紀に至り、仏様に供える花にあき足らぬ僧侶が京都に現われます。彼は自分の考えで花をいけました。彼により、花に形が与えられました。いけばなの誕生です。以来約六百年、多くの花人によりいけばなは時代とともに形を変え現代に続いて来ました。最後に『茶の本』を著した明治の美術家・岡倉天心の言葉を紹介します。「……喜びにも悲しみにも花はわれらの不断の友である……」



岡倉天心（茨城県天心記念五浦美術館蔵）

さて、私は高知県華道協和会という文化団体の専務理事を務めております。高知県華道協和会は戦後間もない昭和二十二年（一九四七）に発足し、現在は県下十七のいけばな流派が加盟しています。発足以後体制が整った後はまるで判で押ししたように、春と秋の年二回いけばな展を開催してきました。また、昭和二十六年の高知市夏季大学の開講以来、演台花を提供してまいりましたが、近年ではご存じの方も多いと思いますが、高知城花回廊に大作いけばな作品を協賛出版しております。余談ながら高知城の特殊な石段を、花材や水の入ったバケツを持って昇り降りするのはなかなかの重労働であります。また、ここで一つ一つ列記はできませんが、これまで様々な福祉・慈善活動を行っております。

高知県華道協和会とはそんな団体です。

最後にPRを一つ。

来る十月二十一日（金）～二十四日（月）の四日間、高知大丸に於いていけばな展を開催いたします。高知の「秋」を感じさせる大小のいけばな作品が展示されます。ご来場いただければこの上ない喜びと存じます。

※工藤昌伸著『いけばなの道』より
画像転載／国立国会図書館ウェブサイト

いの いっしょ

高知県華道協和会 専務理事

「アンテナ」

『世界ふしぎ発見!』出演話

下尾 仁



番組制作会社に勤める友人から電話がかかってきた。コロナが蔓延している中、世界での撮影が厳しい「世界ふしぎ発見!」が世界に行った気持ちになれる場所で番組を作りたく、モネの庭ができた経緯の再現ドラマを撮影するとの事。土佐弁を話せる地元役者三名を探しているの、僕にどうかという話であった。役は次のとおり。①北川村役場の財政担当者(現在の村長・上村誠さん)で年齢は三十五歳前後、②同役場の助役(上村さんの上司)で五十歳前後、③上村さんの部下で二十五歳〜三十歳(あとフランス人役とあった)。僕には②の助役の役をお願いできないかとの事で、撮影日数は①の上村さんの役は二日、それ以外の役は一日のみという話であった。誰もが知っている長寿番組にチラッとでも出られるなんて光栄な話である。二つ返事でやりますと答えた。「では東京のスタッフに下尾さんの連絡先を教えてください」と言われ電話を切った。

いされた助役の撮影は一日と聞いていたので「助役の役も二日間なんですか?」と尋ね返した。スタッフは「下尾さんは二日間の撮影になってますが」と言うので、またまた「助役の役も二日間ですか?」と何ともちぐはぐなやり取りをしていると、「下尾さんは①の上村さん役をやってもらう事になってますが」と言われた。どこでどう話がかわってしまったのかわからないが、どうせ出るなら出番は多い方が嬉しい。日程など詳細を聞き、よろしくお願ひしますとなった。それからしばらくして役者の大先輩である川島さん(六十歳)もこれに出演すると聞いた。役は助役。なるほど、僕より年上の川島さんが上村さん役ではおかしな事になってしまふ。僕の役が変わったのはそういう事かと納得した。

撮影当日、久しぶりに東の方へ行くので早めに家を出発し、モネの庭の近くにある昭和レトロな映画館「大心劇場」に寄ることにした。オーナーの小松さんとは昔からの知り合いであるが、なかなか会う機会がなく、これはチャンスと映画館横の喫茶店で汎山話をした。映画館は度々メディアに取り上げられているが小松さん自身も豆電球と

いうバンドをやっており、かなりの有名人である。小松さんも僕の事を気にかけてくれていたらしく、「最近は何かに出演が?」と聞いてくれたので、実は今から「世界ふしぎ発見!」の撮影するんですよと話す、「放送日はいついつ?絶対見る」と喜んでくれた。時間はあつという間に過ぎ、そろそろモネの庭に行くことすると、小松さんは「苗いらん?」とトマトやほちや、ズッキーニなど大量の苗をお土産にくれた。小松さんは苗をモネの庭に植えてほしかったのだろうか? モネの庭に着くとすぐにスタッフにレストランへ案内され、コーヒーでも飲みながら目を通しておいて下さいと台本を渡された。①バブル崩壊のおおを受け柚子ワイナリーの誘致に失敗、途方にくれる村役場の面々②助役から「なんとかしてくれ」と言われ、洪々受け入れることになった財政担当の上村さん③ANAの機内誌にフランスのモネの庭が特集されているのを見た面々④アポ無しでフランスに向かった上村さん⑤必死の思いで交渉、すると奇跡が。現地の庭師から協力を取り付けることに成功!というストーリーであった。

ふとスタッフ達のテーブルに目をやると、なんだか見覚えのある人がいた。テレビ番組やCMに出ているイタリア出身の俳優リカルドさんだ!! 現地庭師のフランス人役はリカルドさんなんだと緊張感が増してきた。それではまず④の撮影をしますと、小雨降る中、モネの庭を歩くシーンを撮影。そして⑤現地庭師役のリカルドさんとの交渉

シーンからガッチリ握手シーンと無事一日のスケジュールを終えた。明日も朝から撮影があり、家に帰ってまた来るのは大変なので安田町の友人宅に泊めてもらう事に。友人はまるで有名俳優が来たかのごとく至れり尽せりでご馳走をかまえてくれ酒もたらふく飲ませてくれた。まるで民宿にきたかのようには快適に過ごさせてもらった。山岡さんありがとう。英気を養い二日目は北川村役場での撮影であった。助役役の川島さんも合流し①②③のシーンを無事に撮り終え、帰りに川島さんと国虎屋のうどんを食べ帰路についた。

さあ、いよいよ放送日当日。本当に放送されるのであろうか。まず横浪にあるヴィラサントリーニでよさこいを踊るシーンから始まり、ついにモネの庭ができた経緯の再現ドラマがスタート(出たー)。

自分が思っていたより長い時間しっかりと映っていた。演技も自分で言うのもなんだが、いい芝居ができていた。放送終了からしばらくメールやらLINEやらで、どういう事とか、見たでとか言われプチ芸能人気分を味わせてもらった。そして小松さんからもらった苗もそれぞれに実をつけ美味しくいただきました。おしまい

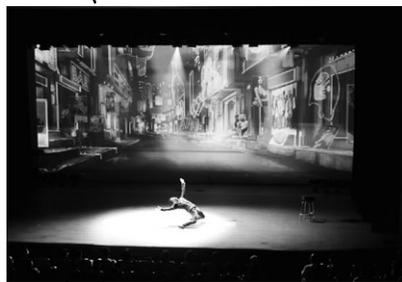
しもお ひとし
一九六九年生まれ。
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

7～8月の事業から

EBIKEN The SHOWTIME

一九九九年公開のSF映画『マトリックス』で主人公が身体を後ろに反らせながら銃弾を避けるという有名なシーン。誰もが一度は見たことがあるのではないのでしょうか。そんなことできるはずが：と思っていたSFのような動きを実際にやった人がいました。その人は、その後数々の国際的な賞を受賞し、多くのテレビ番組で取り上げられました。その人の名は、EBIKENこと蛭名健一。テレビで初めて彼を見たその日から、いつかこの人を高知にお呼びしたいという担当者の熱い思いで、今回の高知公演開催に至りました。

公演では、蛭名さんは、お得意の首落ちや、膝で歩く動き、寝転んだ状態から手を使わずに起きるパフォーマンス等、観る者に多くの驚きを届けてくれました。また、敬愛するマイケル・ジャクソンのパフォーマンスを見せるだけでなく、お客さんと一緒に「スリラー」を踊りました。蛭名さんにレクチャーを受けながら「スリラー」の振り付けを覚えるお客さんもすごく楽しそうでした。パフォーマンス中、音声が途切れるトラブルもありましたが、急遽トークショーに切り替え、お客さんも大爆笑。「急なトラブルだったけど、あれで、お客さんとの距離が縮まった気がして逆に良かったね」と蛭名さんは話してくれました。



初めて見たのではないのでしょうか。美しい音楽と照明に照らされ、全力で舞った二人に大きな拍手が送られました。

そして、もう一人、上西隆史！制作した鉄棒を用いて空中で踊るエアダンスを独自に考案し、世界初の鉄棒ダンスパフォーマンスユニットを立ち上げ、テレビやイベントへの出演が絶えないエアダンス界の先駆者です。上西さんも、人間離れした強靱な肉体を武器に見る者を釘付けにしました。終演後、上西さんは教えてくれました。「実は、こののほりの様に横にぶら下がっている方が、普通にぶら下がっているより楽なんですよ。こののほりは腕の関節で支えられるので、これを長くやっている時は実は休めるんです」。到底、凡人には理解できませんでした。

本公演のチケット完売後も、たくさんのお問い合わせをいただき、そのパフォーマンスを見たくても見られなかった方が多くいらっしゃいました。またいつか、高知で皆さんのパフォーマンスが見られることを担当者も楽しみに待ちたいと思います。

開催日 七月十三日(水)
会場 高知県立県民文化ホール
(グリーンホール)
入場者数 四百五十六名

人形劇 『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』

『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』は、児童書として二〇一三年に刊行され、二〇二二年に「小学生がえらぶ！」こどもの本「総選挙」で第一位を獲得しました。二〇二〇年には、映画やテレビアニメも放映



されるなど、子ども達には大変人気があります。今回、日本を代表する人形劇団ひとみ座が、はじめて銭天堂を舞台化しました。神奈川県川崎市での公演を皮切りに、全国各地を回る中、高知公演はちょうど夏休みの開催となりました。

ひとみ座が使用する人形は、精巧に作られており、客席からは見えない人形のまばたきすら表現できるレベルです。着せている衣装も、実際の登場人物とほぼ同じ衣装です。人形を操る黒子は、その存在をほとんど感じさせないスムーズな動きで、人形のみをステージに浮かび上げられます。それらの動きは、すごく滑らかで、観ている者は、劇中の人物が実際にそこに存在しているかのような錯覚を覚えます。

県民文化ホール・グリーンホールでの本公演、チケットは公演日の十一日前に完売となりました。当日は、幼児や小学生を中心とした親子連れが多く、公演中も含め終始にぎやかな一日となりました。終演後は、駄菓子屋銭天堂の女主人・紅子と、その紅子が飼っている黒猫・墨丸



が、ホールのロビーに登場。来場者のお見送りにと出てきてくれ、写真撮影を求めると多くの親子が公演の記念にと写真撮影を喜んでくれました。

開催日 八月十四日(日)
会場 高知県立県民文化ホール
(グリーンホール)
入場者数 四百九十名

トム・ソーヤーの妄想



風俗歳時記

「妄想」のかわりに「妄想」という言葉を使うのがトレンドである。「宝くじが当たったときのことを妄想してみる」というふうには。——とことなくユーモラスな表現だ。空想している自分をもう一人の自分が揶揄しているようなニュアンスがある。

最近、児童書で「トム・ソーヤーの冒険」(マーク・トウエイン)を読み返し、これと似た感覚を覚えた。

ボリーおばさんに叱られ、ほったたをひっぱたかれたトムが、空想にふける場面だ。

(トムは、自分が病気で死にそうになつて寝ているところを想像した。……おばさんが、自分の上にとりすがって、ただ一言、許すといってくれと、たのんでい

る。けれど、自分は、壁の方を向き、そのことは言わずに死んでしまおう。ああ、そうしたら、おばさんは、どんな気持ちにするだろう。それから、また、トムは、自分が川でおぼれ、髪はくっしょり濡れ、手は永久に動かなくなり、傷ついた心はやすらかに、家に運ばれて来るところを想像した。おばさんは、どんなにトムの上に身をなげかけ、雨のような涙をながすことだろう。……けれど、トムはもう冷たく、青白くなって寝ているばかり、すこしも動かないのだ。……トムのなげきは、もう終わったのだ。)(石井桃子訳)

名場面だ。何度読んでも面白い。そして現代的センスを感じる。このユーモアはどこからくるのだろうか?

空想内容からではない。空想の中味は、芝居がかっている。絵に描いたような紋切り型の「悲劇的情景」だ。面白いのはそんな空想をして悦に入っているトムの心の動きだ。子供の「拗ね」の心理を鮮やかにとらえている。

ここには、独特の語りの構造がある。語り手はトムに同化せず、空想にふけているトムを距離をおいて眺めている。過剰な表現は、語り手がトムに感情移入してないことを示唆している。この距離が絶妙のユーモアをかもし出す。空想しているトムを、トムではない語り手が揶揄している。トムは「妄想」しているのだ。「トム・ソーヤーの妄想」——私の中では、このタイトルがトレンドになっている。(本の虫)



高知を撮る

第37回写真コンテスト入賞作品

撤去されたドロメ棧橋

戸梶 忠俊

(平成19年1月15日 南国市浜改田)

南国市浜改田のこの棧橋は平成4年に作られて平成24年3月に危険と撤去された(20年間使用)。今は十市からドロメを取りよせ干しているとのこと。

第92期 高知市民の大学 受講生募集

自然科学コース 「高知と魚 ～見つける・調べる・育てる・楽しむ・食べる・守る～」
 火曜日 18:30～20:00
 お申し込みや講座についての詳しい内容は文化振興事業団 ☎08-883-5071 まで

開催日	カリキュラム	講師
10月11日	高知と魚：新種発見と分類学研究史	高知大学理工学部 教授 遠藤 広光
10月18日	ブランド養殖魚の開発 ー高知のエスなどを使ってー	高知大学農林海洋科学部 教授 深田 陽久
10月25日	高知の魚料理	高知県立大学 名誉教授 松崎 淳子
11月1日	高知らしいSDGs ～高知カソカ県民会議の取組～	高知大学 理事・副学長 受田 浩之
11月8日	むろと廃校水族館の挑戦 ～これまでとこれから～	むろと廃校水族館 館長 若月 元樹
11月15日	魚資源の管理と消費者の責任	高知大学人文社会科学部 准教授 堀 美菜
11月29日	高知の魚をいつまでも美味しくいただくために	高知県水産試験場増養殖環境課 課長 梶 達也 高知県水産振興部水産政策課 主幹 玉井 大策
12月6日	大月町柏島 島が丸ごとミュージアム 持続可能な里海づくり	NPO 法人黒潮実感センター センター長 神田 優
12月13日	九十九洋概史 ～土佐藩の浦と漁業～	高知県立高知城歴史博物館 館長 渡部 淳

風伯

「薬草から駒」

「薬用植物区」の札。興奮したのは、薬草の根の香りを嗅いだせいではない。水上さんによれば、「薬科大には薬草園があるが、ここほどのものはない」という。でも、はしゃいでいたら雨が降り出し中止に。牧野菜草園に涙雨。大先達の史家が記した「女医・お婉さん」によれば、私の住む高知市朝倉は薬草の宝庫だったらしい。野中婉は

大学の卒論で、朝鮮人参の葉の粉末をウズラに投与していた。玉子をよく生むという薬草だった。ちなみに獣医科大には薬草園などはなかった。水上さんが牧野植物園の園長のころ、「園内薬草観察ツアー」があった。憧れの薬草園が高知にあったとは。しかも、薬学の大家が入園料だけで教授してくれるなんて。牧野へ急げ。

日本で最初の女医だといわれ、朝倉の山野を歩き、多くの薬草を見つけた。お婉さん没後の一七二八年、幕府「薬草取役人」の植村左平次が土佐に来て、薬草の見聞、記録をした。最近になってネットで見る事ができた。でも、くずし字で難読。高知資料ネットの資料保存ボランティアに行ったら、土佐史談会の副会長を発見。持参した文書を解説してもらった。後日文献もいたく。

左平次は落馬までしながら、土佐の山奥へ分け入る。「極めて大難所の山坂」を越え、本邦の「直根上人参」のほか「上品の薬草数種」を発見した。同書は土佐の名産にも言及。あれ、小柄な馬で有名な「土佐駒」の文字が。土佐駒を「丈高く足強き馬なり」「小馬のみ」というのは甚だ誤りなり」と報告、自称土佐の馬の歴史文化研究家の私には大発見だった。

(三)

©2019 SPF (Song) Production Inc., LF (Song) Production Inc. and Motion Cinema Kf

天才ヴァイオリニストと消えた旋律
 The Song of Heaven 第198回
 市民映画会
 9月21日(水)
 9月22日(木)
 高知県立美術館ホール

上映時間
 天才ヴァイオリニストと消えた旋律
 ①10:45 ②15:05 ③19:10
 ゴヤの名画と優しい泥棒
 ①13:10 ②17:20

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。
 一般：前売券 1,800円、当日券 1,500円
 割引：1,000円(前売・当日とも)
 ※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引あり
 【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

公卿さん、お借りします
 ゴヤの名画と優しい泥棒
 ©PATHE PRODUCTIONS LIMITED 2020

今号の表紙

「月見」

坂本 翔哉

月見の中の「月」と「餅」を一つにぎゅっとまとめているところは、コロナ禍の自粛による活動の狭さを、ビジュアルの中で黒い大きな三日月の欠けている部分を小さい満月で埋めているところは人と人の支え合いを表現しました。

白黒とノイズがかかったビジュアルや白から黒のグラデーションと、背景の赤ピンクから青へのカラーグラデーションで、秋から冬に少しずつ移り変わっていくような寂しい気持ちを表しました。

(さかもと しょうや / 龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年生)

国指定重要無形民俗文化財

淡路人形浄瑠璃

出演 淡路人形座

高知公演

◆ 演目 ◆

戎舞
傾城阿波の鳴門

みんなで楽しむ、人形浄瑠璃

人形浄瑠璃を初めて見る方でも大丈夫！上演中に太夫や三味線、人形について分かりやすく解説する時間を設けています。

文化高知 No.227 「隔月発行」
2022年（令和4年）9月1日発行

公益財団法人 高知市文化振興事業団

高知市立
自由民権記念館
【民権ホール】

2022年
11月19日(土)

開場 13:30 開演 14:00

全席自由

未就学児の入場はご遠慮ください

一般／前売り 1,500円 当日 2,000円
高校生以下／前売り 500円 当日 700円

主催・お問い合わせ

公益財団法人高知市文化振興事業団
TEL:088-883-5071 <http://www.kfca.jp/kikaku>

【来場の皆様へお願い】

新型コロナウイルス感染予防策として、本公演来場時は、マスクの着用、入口での手指の消毒、非接触式体温計による検温等にご協力お願い申し上げます。